

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007 ~ 2009
課題番号：19720194
研究課題名（和文）近世イギリスの移民支援策からみる移民とホスト社会の意識形成
研究課題名（英文）Identities of Immigrants and the Host Society, and its Attitudes towards them in Early Modern England

研究代表者
中川 順子（NAKAGAWA JUNKO）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：00322731

研究成果の概要（和文）：

本研究課題の研究成果は次の3点である。第一に、近世ロンドンの外国人教会による救貧は、同胞による困窮移民に対する救済活動として重要な役割を果たした。それは同時に、教会による移民の規律化とアイデンティティ形成の手段でもあった。第二に、18世紀初頭のドイツ系移民はロンドン流入後に支援獲得の手段としてパラタイン移民という自己意識を形成した。彼らの流入は移民に対するイギリス社会の態度を移民規制の方向に転換させた。第三に、他者の顕在化と他者との共生（救貧や法的地位の付与）を巡る議論は、近世イングランド社会（人々）に自己意識の形成を促した。

研究成果の概要（英文）：

This research presents three findings. Firstly, poor relief by the Stranger Churches supported the needy protestant refugees in early modern London. Additionally, it would have served a useful function as a means of control over the Protestant refugees. Consequently, the poor relief led to the maintenance of the bond among the religious refugees and encouraged the development of their identities. Secondly, the large scale influx of German immigrants into London at the beginning of the eighteenth century caused a major shift in the attitudes of British people towards “the others” from favourable to negative or more prudent ones. Meanwhile, the immigrants from Germany might have forged their own new identity as the ‘Poor Palatines’ to arouse the natives’ sympathy for themselves in London. Finally, through the early modern period, the elicitation of “the others” stimulated discussions of how English/British people accepted aliens and granted them the aid and legal status. Furthermore, it helped to foster the growing national consciousness within the host society. These results will contribute to deepen our understanding of the nature of identities of the immigrant communities as well as the host society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	480,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：近世イングランド、外国人共同体、アイデンティティ、ホスト社会、救貧、
帰化、宗教難民（プロテスタント）、パラタイン移民、

1. 研究開始当初の背景

リンダ・コリー著『イギリス国民の誕生』刊行以降、イギリス人の国民意識をめぐる議論は活発化し、現在もその成果を世に送り出し続けている。加えて、2005年にロンドンで起こったテロ事件以後、イギリス社会のアイデンティティとその多元性を巡る問題は、イギリス社会にとって、アクチュアルなものとなり、「他者に寛容な多元的共生型社会」という従来のイギリス像は修正を迫られた。イギリス社会は他者(移民)とどのような関係を歴史的に切り結んできたのか。今その問題が改めて問われている。

しかしながら、他者共生(国籍や移民問題も含め)やアイデンティティにかかる研究の中心は18世紀以降、特に第二次世界大戦以降に集中しており、近世については、研究の空白域となっている。そのような現状にあって、報告者は、かねてより一貫して近世イギリス(イングランド)における移民受容(共生)と国民意識の形成にかかる問題を研究の中心課題とし、その歴史的展開の解明に取り組んできた。そのための鍵として、自己認識を促進する鏡となる「他者」の存在に着目してきた。その「他者」とは、近世イングランドに断続的に大量流入した移民集団、大陸出身の宗教難民(プロテスタント)、パラタイン移民である。彼らの流入によるインパクトは大きく、そのような事態に直面したイギリス社会では、移民の同化・受容、彼らへの支援の是非をめくり議論が起こった。その結果、他者に対峙したホスト社会は、その受容過程において、自己を認識することとなる。

上記のことを踏まえて、本研究の学術的な背景と意義は、次の3点にある。第一に、従来の近世移民史研究においては、プロテスタントという枠組みにおいて、移民をひとまとまりのものとして扱ってきた。移民の結束・アイデンティティを自明のものとし、そのこ

とが問われることはなかった。しかしながら、報告者は近年のディアスポラ論の成果を摂取しつつ、移民たちが移民先で構築するアイデンティティや移民間の紐帯とその限界に着目している。出身地の異なる彼らの間に共通のアイデンティティは希薄であった。移民はイングランドに到着し、他者に囲まれ、そのなか教会・共同体という核を得て、初めて自らやその故郷を意識する。本研究は画一的に理解されてきた従来までの移民像の修正を試みる。

第二に、本研究は、これまでの移民研究が移民主体かつその貢献を強調しがちであり、ホスト社会との関係で移民を扱う観点が希薄であった点を克服するものである。移民とホスト社会の相互作用、双方向的な影響力にも留意することによって、移民偏重の研究状況を是正する意義を有す。日本人である報告者の立場は、当事者には看過されがちな視点からのアプローチを可能にする。

第三に、イギリス社会における移民への対応の変化と意識形成のプロセスの解明を通じて、イギリス移民史上の重要な転換点を、20世紀初頭(The Alien Actの成立)にだけでなく、同じく帰化法の成立と撤廃を経験した18世紀初頭に求めることにある。本研究は、移民史を従来の固定的な理解から解放し、「寛容な社会イギリス」の再検討を通じて、イギリス社会に対する理解の深化に寄与する。以上が、本研究の学術的背景と意義である。

2. 研究の目的

本研究は、16世紀後半から18世紀前半のイギリス社会における移民支援策とそれにかかる議論が、他者統合や移民とホスト社会双方の意識(アイデンティティ)形成に果たした役割の解明をその目的とする。本研究の

対象となる移民は、主に 17 世紀後半から 18 世紀前半に流入したユグノー、パラティン移民である。また、移民支援策とは、具体的には、当該時期に実施され、議論となった、移民に対するイギリス社会と外国人教会による救貧事業と外国人への法的地位の保証（帰化とデニズン、一般帰化法の制定と撤廃）である。具体的には、以下の 2 点の解明を研究目標とした。

- (1) ホスト社会における移民共同体の存在とその支援活動は、移民とその共同体に、同胞意識の自覚と構築・強化をもたらした。その際、共有された（が求められた）意識とはどのようなものか。
- (2) 他者である移民の存在とその顕在化は、彼らの受容（同化・共生）と彼らへの支援をめぐる議論の過程で、ホスト社会の国民意識の形成を促進した。その具体的なプロセスと内容はどのようなものか。外国人に対する法的地位（帰化、デニズン、市民権、一般帰化法）の歴史的変遷とその実態の解明

ホスト社会にとって他者受容の是非を問うことは不可避であり、それは現代においても同様である。本研究は、国民国家形成期のイギリスにおいて、イギリス社会、移民の双方によって経験された他者との共生とその問題点（限界）、自己意識の構築のプロセスを明らかにするものである。本研究により、自己の境界確定と移民受容に模索するイギリス社会の歴史的起源と展開の解明が期待できる。その成果は現代イギリス社会や文化への理解のみならず、近い将来、重要な労働力として移民を受け入れることになる日本社会にとっても、有効かつ示唆的な研究である。

3. 研究の方法

本研究を行うにあたって、検討・分析の中心対象となるのはロンドン在住の外国人と外国人共同体、外国人教会（フランス人教会、オランダ人教会）による諸活動である。具体的には、教会が実施する救貧事業とそれに関わる教会（共同体）のエリートたちの見解・行動、それらに対する信徒の反応について、外国人教会関係史料（長老会の議事録）を中心に明らかにしてゆく。それと同時に、外国人共同体とホスト社会の意識形成の解明に必要な史料類の調査・収集を行う。

(1) については、最大の移民定住地であったロンドンを中心に、外国人教会（とくにフランス人教会）のユグノーへの救貧活動中

心に、その実態と教会側の同朋意識（「移民アイデンティティ」）構築のための動き、移民の社会的結合の有り様を明らかにする。そのために、本研究期間においては、フランス人教会と共同体の指導・統括者の集まりである外国人教会長老会の議事録と救貧の実務に關与していたフランス人委員会の記録の分析を進めた。これまでに実施した義援金の分配にかかる研究をさらに進め、その成果と統合し、史料の関係上、長老会からの視点からではあるが、教会を中心とした共同体と移民たちにはどのような意識の構築と共有が求められたのかを明らかにした。さらに、救貧のためにユグノーたちが設立した友愛協会の活動についても調査した。その目的は、平信徒あるいは教会の外にいる移民たちの意識を協会活動により見ることが可能だからである。研究を進めるにあたり、移民救済活動には不可欠イギリス社会側の対応にも留意した。

ユグノーとパラティン移民へのイギリス社会の対応を比較したとき、両者には明らかな差違が見られる。(2)については、(1)の成果を踏まえつつ、相前後して到来した2つの移民を対象に、イギリス側の移民受け入れと彼らに対する支援（救貧に加えて帰化法、とくにその撤廃の議論を視野にいれて）の是非を巡る議論（言説）から、イギリス社会に見られる移民への対応の変化を検証する。最終的には、そこにはイギリス社会の国民意識の形成が影響していることを明らかにしたい。本研究期間中には、(1)を中心に進めながら、順次(2)のために基礎研究、史料収集を進める予定である。(2)については、一般帰化法に至る外国人の法的地位の問題を前提として明らかにするため、外国人の帰化とデニズンに関する史料の精査を 16 世紀後半、17 世紀前半と段階的に進めた。また、ロンドンを中心に外国人への諸権利の付与とそれに対するロンドン社会の反応を検討し、外国人だけではなく、ホスト社会との双方向的な分析を実施する。

研究初年度においては、外国人教会による慈善活動の実態の詳細を明らかにするために、17 世紀後半から 18 世紀初頭のユグノーに対するフランス人教会の活動を対象に分析を進める。これについては、すでに一部分分析を開始しているフランス人教会の議事録とフランス人教会に残存する義援金支給に関する記録の再検討、ならびにその詳細な分析を継続的に行う。移民支援の窓口となったフランス人教会の二つの史料をつきあわせることで、当該時期の対移民支援の全体像を包括的にかつ立体的に把握することが可能となる。教会関係の文献・史料の収集、精読に努めた。2 年目以降には、本格的に研究を開始する研究目的の第 2 点目（移民の社会

統合・同化とホスト社会側への影響)の実施に必要な文献・史料収集を開始した。具体的には、パラタイン移民と帰化法にかかる史料の収集を行った。イギリス側が行った議論については、議会関係の文書と同時代のパンフレットや刊行物の収集を行った。

4. 研究成果

研究の目的の(1)については、外国人教会の長老会の議事録と救貧受給者の史料分析から、外国人教会とホスト社会が提供した義援金とその受給者の実態を明らかにした。外国人教会はロンドンに到着した移民たちに対する救貧活動の拠点として重要な役割を果たしていた。長老会の記録からは、救貧活動が慈善だけではなく、到着した難民たちと共同体との結節の要であったこと、移民たちをコントロールするためのものであったことも明らかになり、これまで強調されてきた移民のなかの自明のアイデンティティの相対化と教会による意図的な規律化という新たな移民共同体のありようを解明できた。教会が信徒や流入者たちに求めた、またイギリス側にアピールしたアイデンティティとは「敬虔なプロテスタント」であった。外国人教会による救貧活動はその対象者の身分を問わなかったことから、イギリスにおける救貧システムよりも先んじた福祉の在り方でもあった。救貧事業の重要な担い手であったフランス人委員会については史料収集ができたものの、その十分な分析には至らなかった。今後の継続課題とする。本研究成果の一部は次年度刊行の予定である。

研究目的の(2)については、17世紀後半から18世紀前半の帰化・デニズンに関してその付与者の実態を明らかにした。また、18世紀後半については、移民への権利付与とホスト社会の移民共生のせめぎ合いのなかで、移民救済がホスト社会の意識形成に果たした役割を明らかにした。一件矛盾する、他者の差別化・差違化と他者への同情論はともにイングランド人の自己意識確立を促進した。後者については、信仰を同じくする兄弟、彼らへのチャリティというレトリックが繰り返し強調された。2.パラタイン移民に関しては、到着者リストの分析と彼らに対する慈善活動から、ロンドン到着後に救貧活動に有利になるとの判断から、彼らが出身とは関係なく意図的に「哀れな(貧しい)パラタインの人々」と自己表象し、それは北米大陸移住後「ドイツ系移民」アイデンティティへと継承された。ユグノーとは異なりホスト社会にメリットをもたらさなかったパラタイン移民の存在は、移民歓迎論の後退の要因となり、イギリス社会はその移民政策を転換させた。さらに、その過程で自己意識を醸成する

ことになることが示唆されているが、この点に関しては史料収集が終了したので、その分析の更なる進捗は今後の課題としておく。研究目的の(2)についても、既刊の論文、学会報告に加えて、次年度以降にその一部が研究成果として刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

中川順子、「17世紀前半のイングランドにおける帰化取得者とデニズン」、『文学部論叢』(熊本大学文学部) 100号、2009年、69-80頁。査読あり。

<http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/>

〔学会発表〕(計 1 件)

Junko Nakagawa, The image and the reality of the 'Poor Palatines' in early eighteenth-century London, British Society for Eighteenth-Century Studies 38th Annual Conference 7th January 2009, St. Hugh's College, Oxford

〔図書〕(計 1 件)

中川順子、「追放すべき他者であり、同情に値する兄弟であり」、光永雅明編『文化的多様性のイギリス史』、世界思想社、近日刊行。印刷中 2010

6. 研究組織

(1)研究代表者

中川 順子 (NAKAGAWA JUNKO)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：00322731